

「あなたは、なぜ教員になったのですか」人に聞かれそうで、意外と聞かれることもなく、ここまでできてしまった。あまり覚えてはいないが、数人いや10人くらいには聞かれたような気がする。どちらかというと、話すよりも書いているほうが多い。

今回も改めて書いてみる。質問に対する答えは、恩師の影響である。それは間違いない。だが、一番大きな要素、強い動機とは言い難い。いわば、表向きの理由である。

昔は、今と違って、将来何になりたいかと聞かれるることは滅多になかった。今は、キャリア教育だ、職場体験だ、進路学習だと、将来どんな仕事に就きたいかと聞かれることが多い。みんな大変である。何とか答えなければならない。決まっていないと、だめな人のように思われてしまう。答えられないと、自分はだめなのかと思ってしまいそうである。

卒業文集には、昔も今も、将来何になりたいかを書くコーナーがある。大谷翔平選手をはじめ成功を収めたプロスポーツ選手、オリンピック選手などの場合は、文集に書いたことが現実のものとなっていることがある。そこから、夢は叶うとなる。

自分はどうなのか。中学校の卒業文集かどうかは忘れてしまったが、新聞記者と書いた記憶がある。もちろん、本気で考えてはいない。苦し紛れである。だが、あながち真実ではないとも言えない。追い込まれた状況で出てきた答えである。自分の中のどこかに、新聞記者への憧れのようなものがあったのではなかろうか。

文章を書くことが好きだったわけではない。国語の授業は嫌い。作文も好きではない。作文コンクール、読書感想文コンクールには興味がない。一方、社会科は好きだった。地理も歴史も政治に経済も好きだった。新聞記者という漢字4文字を書くことになった背景には、この社会科好きがあったことは否定できない。きっと調べることは好きだったのである。

本気で心から新聞記者になりたいと思っていたのであれば、中学卒業後も少しは努力を重ねたかもしれない。だが、とりあえず書いただけでは、自ら努力をするはずがない。漢字4文字は、あっという間に、どこかに吹き飛んでしまった。

その後も、社会科好きは変わらなかった。今でも変わらない。文章を書くほうはというと、昔も今も好きではない。ところが、教員になり、学級担任となり、毎日のように書くようになった。7年前からは、ほぼ毎日書いている。もしかしたら、書くことは嫌いではなかったのかもしれない。いや、そんなことはない。たぶん、エッセイ、隨筆、隨想に限っては好きとはいわないが、嫌いでもないのかもしれない。その程度である。

中学生の段階で、将来は、〇〇になりたいと明言する生徒がいる。すごいと思う。自分の中学時代とは雲泥の差である。ぜひ、その志を大切にしながら力強く生きていってほしい。新聞記者になろうともしなかった元教員からの応援メッセージである。